使徒の働き7章38－60章 「最初の証人（殉教者）」

1A 偶像礼拝 38－50

1B 金の子牛以降の歴史 38－43

2B 建物の中に住まわれない方 44－50

2A 耳を閉ざした民 51－60

1B 聖霊に逆らう先祖 51－53

2B 天への召し 54－60

本文

今晩は、使徒の働き 7 章の後半部分です。38 節から読みます。ステパノが、サンヘドリンの裁判を受けています。彼らは、聖なる所とモーセの律法に逆らうことばを聞いたという証言に基づき、その弁明を迫っています。そしてステパノが答えています。

彼は、アブラハムの歴史から語り始めました。そこにあるのは、主がどこにいようと、語られ、その言われたことに従う、アブラハムなどの神のしもべの姿と、そうではない民の姿です。ヨセフの時は、兄たちがヨセフを売ってしまいましたが、再びあった時にはひれ伏していました。モーセは、初めイスラエル人を救おうとした時、イスラエル人は彼を退けました。二度目に、彼を預言者として受け入れました。それは、主イエスが初めに来られた時に彼らが受け入れないことを暗に示しており、この方が再び来られる時に、そのことに気づくことを示していると思われます。

1A 偶像礼拝 38－50

こうしてモーセを預言者として認め、受け入れた民でありますが、それでも彼の言うことを聞かなかったのが、あなたがたの先祖だよ、と言わんとしているのが 38 節以降の内容です。

1B 金の子牛以降の歴史 38－43

38 また、モーセは、シナイ山で彼に語った御使いや私たちの先祖たちとともに、荒野の集会にいて、私たちに与えるための生きたみことばを授かりました。

モーセは、シナイ山で律法を授かりました。その時に仲介として、御使いが用いられました。御使いが、神のことばをモーセに携えました。使徒ヨハネが、黙示録を、主の御使いによって受け取っていたことを思い出してください。そのようにして、受け取りました。そして、それをそこにいた民が受け取りました。

「荒野の集会」とありますね。ここの集会は、エクレシア、他の箇所では教会と訳されているギリ

シア語です。イスラエルの民が集まっているように、私たちも集まり、そこで神の生けることばを聞くのです。大事なのは、そのことばが生きていて、それを聞いているということです。聖霊によって、主の生きたことばを聞く集まり、ということであります。

39 ところが私たちの先祖たちは、彼に従うことを好まず、かえって彼を退け、エジプトをなつかしく
思って、40 アロンに言いました。『われわれに先立って行く神々を、われわれのために造ってほしい。
われわれをエジプトの地から導き出した、あのモーセがどうなったのか、分からないから。』41 彼ら
が子牛を造ったのはそのころで、彼らはこの偶像にいけにえを献げ、自分たちの手で造った物を
楽しんでいました。

民は、モーセを預言者と認めた後も、なおのこと彼の言うことに聞き従いませんでした。むしろ、金の子牛を始めとして、偶像礼拝に戻っていったのです。ステパノの話を聞いているユダヤ人は、先祖を大変、敬っていました。その言い伝えを守っていました。けれども、その先祖が、初めからモーセの言うこと、神の生けることばを聞いていなかったのです。

「エジプトをなつかしく」と言っていますね。彼らは、自分が奴隷で虐げられていることを忘れて、そこから自由にされたことを敬わず、その時に拝んだ物が欲しいといったのです。私たちが、キリストにあって新しく生まれて、新しい歩みをして、罪の束縛から解放されているはずなのに、また古い罪の中に戻っていくのです。

42 そこで、神は彼らに背を向け、彼らが天の万象に仕えるに任せられました。預言者たちの書に
書いてあるとおりです。『イスラエルの家よ。あなたがたは 荒野にいた四十年の間に、いけにえと
ささげ物を、わたしのところに携えて来たことがあったか。43 あなたがたは、モレクの幕屋と神ライ
パンの星を担いでいた。 それらは、あなたがたが拝むために造った像ではないか。わたしはあな
たがたを、バビロンのかなたへ捕らえ移す。』

金の子牛を造ったイスラエルの姿は、その後も続きました。ヨシュアたちが約束の地に入って、間もなくして、士師記を見れば、バアルやアシェルに従ったことが書いてあります。サムエルの時代、そしてダビデの時代は霊的復興が起こりましたが、ソロモンの後に国が分裂し、北イスラエル王国はアッシリアへ、南ユダ王国はバビロンに捕え移されました。それらの直接原因は、偶像礼拝でした。彼らは律法を持っていることを誇りにしていましたが、歴史を見たらかなり長いこと、偶像を造っていたのです。

ところで、ステパノはアモス書を引用しています。ここで、聖書を開いたわけではありません。彼には、相当の聖書知識があったことが分かります。そして、聖霊がそれら、神のことばを思い起こさせてくださっています。「ルカ 12:11-12 また、人々があなたがたを、会堂や役人たち、権力者た

ちのところに連れて行ったとき、何をどう弁明しようか、何を言おうかと心配しなくてよいのです。言うべきことは、そのときに聖霊が教えてくださるからです。」聖霊は、私たちに主のことばを思い起こさせて下さる働きをなさいます。特に、反対者の前にいて、弁明する時、恐れずに主を心であがめていれば、その時に必要なことばを与えてくださるのです。

2B　建物の中に住まわれない方　44－50

44 私たちの先祖たちのためには、荒野にあかしの幕屋がありました。それは、見たとおりの形に造れとモーセに言われた方の命令どおりのものでした。45 私たちの先祖たちは、この幕屋を受け継いで、神が自分たちの前から追い払ってくださった異邦の民の所有地に、ヨシュアとともにそれを運び入れ、ダビデの時代に至りました。

ここからステパノは、まるで神殿の建物自体が彼らを聖にしているという考えに対して、反論します。荒野に、「あかしの幕屋」がありました。つまり、神が生きておられることを証しされ、十戒の刻まれている契約の板がそこにありました。その場所は移動していたのです。そして、幕屋の状態は、実にダビデの時代まで、大体、モーセの時から四百年の間、続いていたのです。ですから、大事なのは、主が語られていたということであります。

46 ダビデは神の前に恵みをいただき、ヤコブの家のために、幕屋のとどまるところを求めました。

ダビデの生涯は、主が恵みによって共におられる、ということでした。主に対して、深い感謝と敬う思いが与えられていました。そこで、自分は杉材の宮殿に住んでいるのに、契約の箱が天幕の中に安置されていることはおかしい、神殿を造りたいと、友人で預言者のナタンに言いました。ナタンは良いことだと言いましたが、主はナタンに、「わたしは、家に住んだことはなかった。」と言われ、ご自身が一方的に彼に良くしてくださり、共におられたことを思い出させました。建物ではなく、ダビデの家そのものを祝福し、その家系から、世継ぎの子から、神の国を受け継ぐ者、すなわちキリストを与えることを約束されたのです。（Ⅱサムエル７章）

47 そして、ソロモンが神のために家を建てました。48 しかし、いと高き方は、手で造った家にはお住みになりません。預言者が語っているとおりです。 49『天はわたしの王座、 地はわたしの足台。あなたがたは、わたしのために どのような家を建てようとするのか。 ――主のことば―― わたしの安息の場は、いったいどこにあるのか。50 これらすべては、わたしの手が造ったものではないか。』

神殿を建てたソロモン王自身が、神殿奉献式の時に祈っていたことです。「Ⅰ列王 8:27 それにしても、神は、はたして地の上に住まわれるでしょうか。実に、天も、天の天も、あなたをお入れすることはできません。まして私が建てたこの宮など、なおさらのことです。」

ここが、ステパノが論じていることです。聖なる所に拘る彼らは、そこに主を治められるはずがないという、あまりにも明らかな真理を忘れているということです。彼らは、宮があるからそこに神がおられて、救いもあるのだと信じていたのです。けれども、イザヤが預言しました。「イザ 66:1-2【主】はこう言われる。「天はわたしの王座、地はわたしの足台。あなたがたがわたしのために建てる家は、いったいどこにあるのか。わたしの安息の場は、いったいどこにあるのか。2 これらすべては、わたしの手が造った。それで、これらすべては存在するのだ。――【主】のことば――わたしが目を留める者、それは、貧しい者、霊の砕かれた者、わたしのことばにおののく者だ。」

エレミヤも預言していました。「エレ 7:3-6 イスラエルの神、万軍の【主】はこう言われる。あなたがたの生き方と行いを改めよ。そうすれば、わたしはあなたがたをこの場所に住まわせる。あなたがたは、「これは【主】の宮、【主】の宮、【主】の宮だ」という偽りのことばに信頼してはならない。」主のことばに聞き従っている中で初めて、主がそこに住まわれるのです。

2A 耳を閉ざした民 51－60

そこでステパノは、彼らの心を聖霊によって示されて、いかに頑なであるかをはっきりと述べます。

1B 聖霊に逆らう先祖 51－53

51 うなじを固くする、心と耳に割礼を受けていない人たち。あなたがたは、いつも聖霊に逆らっています。あなたがたの先祖たちが逆らったように、あなたがたもそうしているのです。

ここが、ステパノがずっと言ってきたことです。彼らはモーセの律法に彼が逆らっているというのですが、いや違うでしょ、あなたがモーセの言っていることに逆らっているのでしょ、と言っています。ここの「心と耳に割礼を受けていない」というのは、モーセの言葉から来たものです。「申 10:16 あなたがたは心の包皮に割礼を施しなさい。もう、うなじを固くする者であってはならない。」

そして、「いつも聖霊に逆らっています」と言っています。御霊こそが、人の心と霊の耳に語りかけられる方です。しかし、イスラエルの民が荒野の旅をしている時、この方の声に逆らいました。そして、イエスが宣教しておられる時も、聖霊の力で行われました。そして今、ステパノが聖霊に満たされて、これらのことばを語っています。一貫して、昔から先祖が逆らっているように、あなたがたは逆らっているのです、と言っているのです。

52 あなたがたの先祖たちが迫害しなかった預言者が、だれかいたでしょうか。彼らは、正しい方が来られることを前もって告げた人たちを殺しましたが、今はあなたがたが、この正しい方を裏切る者、殺す者となりました。

正しい方とは、イエスご自身のことです。預言者たちは、メシアを預言してそれで迫害されました、

彼らはその子孫であります。しかし先祖たちよりも悪いのです。そのメシアご自身が来られたのに、この方を殺してしまったからです。

イエスがこのことをマタイ 21 章で語られました。ぶどう園の農夫のことです。主人が収穫の分け前のためにしもべを遣わすも、農夫たちは袋叩きにして送り返します。息子なら敬ってくれるだろうと思ったら、息子ならば殺せば自分たちが相続財産を手に入れることができるとして殺してしまいます。そして 23 章でも、厳しく指摘なさいました。「23:34-35 だから、見よ、わたしは預言者、知者、律法学者を遣わすが、おまえたちはそのうちのある者を殺し、十字架につけ、またある者を会堂でむち打ち、町から町へと迫害して回る。それは、義人アベルの血から、神殿と祭壇の間でおまえたちが殺した、バラキヤの子ザカリヤの血まで、地上で流される正しい人の血が、すべておまえたちに降りかかるようになるためだ。」

53 あなたがたは御使いたちを通して律法を受けたのに、それを守らなかったのです。」

主が、御使いによってご自分を現わされたところを聖書ではずっと見ます。律法は、御使いにある神の栄光によって与えられている。シナイ山で黒雲や稲妻や雷、地震などが起こりますが、それは神の栄光が御使いたちと共に降りて来ているからです。ところが、あなたがたこそが律法を守っていないと咎めているのです。

2B 天への召し 54－60

54 人々はこれを聞いて、はらわたが煮え返る思いで、ステパノに向かって歯ぎしりしていた。

歯ぎしりしていたというのは、襲いかかろうとして獲物を狙っている獣のそれに似ています。怒りが爆発する寸前です。ペテロが、五旬節の時、聖霊が降り、ユダヤ人たちにはっきりと語ったときは、「心が刺された」とあります（使徒 2:37 参照）。彼らは悔い改めました。しかし、ここでは悔い改めようとしません。ですから、はらわたが煮えくり返っているのです。

聖霊は、ここまでの働きを行われます。世に誤りを認めさせます。「ヨハ 16:8-11 その方が来ると、罪について、義について、さばきについて、世の誤りを明らかになさいます。9 罪についてというのは、彼らがわたしを信じないからです。10 義についてとは、わたしが父のもとに行き、あなたがたがもはやわたしを見なくなるからです。11 さばきについてとは、この世を支配する者がさばかれたからです。」聖霊による説教は、生きた神のことばが人々の心を刺して、悔い改めに導きます。そして、かたくなな者たちは、激しく反応します。なぜなら、すでに自分が罪人であることを、はっきりと示されているけれども、それに応答しようとしないからです。

55しかし、聖霊に満たされ、じっと天を見つめていたステパノは、神の栄光と神の右に立っておられるイエスを見て、56「見なさい。天が開けて、人の子が神の右に立っておられるのが見えます」と言った。

なんという対照でしょうか！片や、怒りと憎悪に満ちているのに、もう一方は平安と喜びに満ちています。使徒の働きはまさに、聖霊のバプテスマ、あるいは聖霊の満たしの記録です。私たちはここで勇気を得たいです。どんなに憎悪に満ちた世に生きていても、その只中で聖霊の喜びと平安を持つことができるということです。

そして大事なのは、天をじっと見つめているステパノです。天の望みが、困難を耐える力を与えます。コロサイ書 3 章でパウロが勧めました。「3:1-4 こういうわけで、あなたがたはキリストとともによみがえらされたのなら、上にあるものを求めなさい。そこでは、キリストが神の右の座に着いておられます。上にあるものを思いなさい。地にあるものを思ってはなりません。あなたがたはすでに死んでいて、あなたがたのいのちは、キリストとともに神のうちに隠されているのです。あなたがたのいのちであるキリストが現れると、そのときあなたがたも、キリストとともに栄光のうちに現れます。」

興味深いのは、今、主は、神の右に立っておられることです。座っているという言葉が普通ですが、今は、立っています。これは、主が地上に戻ってこられる時に行われることです。しかし、その前でも、殉教者を受け入れる時にも行われると言えるでしょう。

57人々は大声で叫びながら、耳をおおい、一斉にステパノに向かって殺到した。

イエスが天に神の右の座におられるということを聞くや否や、彼らは一斉にステパノに向かいます。イエスがキリスト、メシアであることを語っている言葉で、イエスご自身がカヤパの前でこのことを語られ、神への冒涜だとしてカヤパは衣を裂き、死刑判決を出しました。その時も不法な手続きでしたが、ここもそうです、最高法院の判決を待たないで、騒ぎ、暴動の中で殺します。ここから先は、ステパノは、主イエスご自身の身を見つめ、主の死と同じように殉教します。

58そして彼を町の外に追い出して、石を投げつけた。証人たちは、自分たちの上着をサウロという青年の足もとに置いた。

町の外に引きずり出して、石を投げつけます。主もエルサレムの町の外に出されました。今、旧市街の門の一つにステパノ門というものがあります。そこから出されたという言い伝えです。

このような恐ろしい仕打ちを受けたのですから、ステパノの証しは徒労に終わった、逆効果だったのではないか？と思われるかもしれません。しかし、神の前で正しい良心で、人々に告白することは、必ず証しを残すのです。ステパノは、狂気に満ちた迫害者へと変貌するサウロ、後のパウロですが、彼に真理を植え付けました。パウロは、それが真理であることを知っているからこそ、激しい迫害を加えました。しかし、それは彼が降参する始まりだったのです。

59 こうして彼らがステパノに石を投げつけていると、ステパノは主を呼んで言った。「主イエスよ、私
の霊をお受けください。」60 そして、ひざまずいて大声で叫んだ。「主よ、この罪を彼らに負わせな
いでください。」こう言って、彼は眠りについた。

なんとすばらしい殉教でしょうか。彼は自分の主イエスが死なれた時のように、死んでいきました。自分の霊を主に任せて、迫害者らの罪を赦してくださいと祈っています。その祈りは聞かれます。パウロが、その大きな罪を赦されて、福音宣教者へと変えられるのです。それは、「彼は眠りについた」と言っています。これは、ラザロのよみがえりのように、死で終わりではない、死んでもよみがえるという希望があるからです。

思い出しましょう。主の約束は、「わたしの証人になる」であります。この証人には、殉教の意味も含まれると前にお話ししました。ステパノは、第一の殉教者になります。そして、その死によって、弟子たちはエルサレムから離れ、福音を語り始めます。そして、繰り返しますが、地の果てまでの宣教、異邦人への宣教に、ここにいる青年、サウロが選ばれるのです。死は死で終わらない、主が死なれたことによって、豊かないのちが結ばれたように、キリストの名のゆえの死は、人々への証しとなり、力となり、いのちとなるのです。詩篇の著者が言っている通りです、「116:15 主の聖徒たちの死は【主】の目に尊い。」

私たちは、殉教はしないかもしれません。けれども、自分に死ぬことは、キリストのいのちが現れます。「Ⅱコリ 4:10-11 私たちは、いつもイエスの死を身に帯びています。それはまた、イエスのいのちが私たちの身に現れるためです。私たち生きている者は、イエスのために絶えず死に渡されています。それはまた、イエスのいのちが私たちの死ぬべき肉体において現れるためです。」